



瀬田の丘

創刊 1973 年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

年間第 6 主日 A 年 (2026 年 2 月 15 日)

主任司祭 小西広志神父

第一朗読：シラ書 15 章 15 — 20 節

第二朗読：コリントの信徒への手紙一 2 章 6 — 10 節

福音朗読：マタイによる福音書 5 章 17 — 37 節

律法（トーラー）

「律法」は広い意味では、福音に対立する掟という否定的なニュアンスを持っています。狭い意味、あるいは厳密な意味では旧約聖書の中の『モーセ五書』（『創世記』、『出エジプト記』、『レビ記』、『民数記』、『申命記』）を指します。『モーセ五書』に記された律法は、成文化された律法ですが、それ以外にユダヤ教では口伝で伝わっている律法もあります。また、律法の多種多様な解釈もミシュナーと呼んで、律法と同じように扱っています。

聖書の中に記されている律法の数々は「神の言葉」ですので、宗教的な戒律ととらえるよりも、むしろ、神から人間への語りかけと受けとめたらよいと思います。しかし残念ながら、律法を守りさえすれば救われる、あるいは律法を遵守しているから救われているといった少し偏狭な信仰態度に陥ることは時としてありました。これを律法主義といいます。

今日の福音朗読の箇所は、古代の教会の中でイエスさまによってもたらされた新しい救いの事実は律法とは無関係なのだ、だから律法を守る必要がないのだと主張するグループと、いや律法は神さまから与えられた大切な「言葉」だから、いくらイエスさまによって救いもたらされたとしても、律法を守らなければならないのだと考える人々との意見の相違が生じていたことが背景にあるのかもしれない。

『シラ書』は、ヘレニズム文化にイスラエルが染まった時代の作品です。人間の主体的な判断とか、自由や意志とかが尊ばれた時代にあって、神の知恵に従って生きていくことを主張しています。自由な判断や意志は神から与えられた賜物であって、「その意志さえあれば、お前は掟を守り」（15 節）

生きることができる^{しゅちよう}と主張^{あらか}しています。そして、律法に神の知恵^{あらわ}が現^{あらわ}れているとし（1章26節参照）、律法を守って生きることの大切さを今日の第一朗読は語^{かた}っています。

第二朗読には「この代の支配者^よは誰一人^{しはいしや}、この知恵^{だれひとり}を知りませんでした」（8節 フランシスコ会訳）とあります。それで、彼らはイエスを十字架にかけたのです。しかし、イエスの十字架は神の知恵の現れです。それは「永遠の昔にあらかじめ定めておられた」（7節 フランシスコ会訳）ものです。十字架に示^{しめ}された神の知恵を受け入れる者だけが神の栄光を受けることができるのです。

17節の「完成するためである」に注目してください。イエスさまが完成する「律法や預言者」（17節）は、7章12節に示される「だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である」という命令^{めいれい}にまとめられます。二つの「律法と預言者」ということばに^{かこ}囲まれた部分で、キリスト者の行うべき^ぎ「義」（20節）の話題^{てんかい}が展開します。「義」とは、神との関わりを大切に^{いまし}する生き方を指します。戒め（律法）に込められた神からの呼びかけに耳^{かたむ}を傾け、それに^{おう}応じて生きることです。律法は、単に守るだけのものではなく、律法のもつ本来の意味^{かんしん}に関心を向けることが大切になります。

次に21節の『殺すな。人を殺した者は裁き^{さば}を受ける』を見てください。モーセの十戒にあるのは「殺すな」（出20章13節、申5章17節）だけです。これは神からの呼びかけです。これに「人を殺した者は裁き^{さば}を受ける」という解釈^{かいしやく}を加えたのは人間です。そして、この掟^{おきて}が適応^{てきおう}されたのは凶器^{きようき}による殺人だけに限定されたそうです。そうすると「人を凶器を使って実際に殺してないから、掟^{おきて}に反^{はん}していない」という理解が人々の中に生じます。

しかし、イエスさまが光をあてたいのは「殺すな」という掟^{おきて}には、人間のいのちに無関心ではいられない父なる神さまの想い^{おも}です。22節から「兄弟」ということばが使われます。イエスさまにとって、「殺すな」という掟^{おきて}には人間が共に手^{たずさ}を携えあって生きていくという人間の関わり^{じげん}の次元^{ふく}が含まれていると見ていたのです。だからこそ、23節以下で兄弟との関わり^{かか}の回復^{かいふく}が、ひいては神との関わり^{かか}の回復^{かいふく}につながると主張するのでしょう。

関わり^{かか}の回復^{かいふく}については33節の『偽^{いつわ}りの誓^{ちか}いを立てるな』にも見られます。十戒には神の名をみだりに唱える^{とな}などあります（出20章7節）。誓^{ちか}いとは自分のことばと行為^{こうい}の正統性^{せいとうせい}を主張^{ちか}するため^{もち}に用^{もち}いますが、もし人が互いに完全な信頼関係になれば誓^{ちか}いのことばは自分より正しいもの^つにかけて行うことになります。つまり、神を引き合いに出して誓^{ちか}うのです。これは神を自分に都合^{ごう}よく利用^{ごう}することにあたります。イエスさまはもはや誓^{ちか}い合うことは必要ない。なぜなら信頼^みに満ちた関係である「兄弟」が目の前にいるからです。